2015年 会頭ミッション
イタリア・ポーランド 視察団報告

ミラノ・フィレンツェ　クラクフ

本所は立石会頭を団長として、6月6日から9日間の日程で、総勢36名の視察団を派遣した（主管・国際交流特別委員会 白石 方一委員長）。食の博覧会として開催されている「ミラノ万博」の京都ウィーク・オープニングイベントへの参加、姉妹都市提携50周年、会議所友好提携10周年を迎えるフィレンツェ、ポーランドの京都と称されるクラクフを訪問した。

ミラノ国際博覧会で〝京都〟をアピール

ミラノ万博は「地球に食料を、生命にエネルギーを」をテーマに、5月から10月末まで開催されている。約150の国や地域、企業のパビリオンが出展し、2500万人の来場者を見込む。日本館は、パビリオンの中でも最大規模を誇り、ユネスコの無形文化遺産となった「和食」の魅力を凝った映像など先端技術で紹介し、世界での和食ブームも相まって最も人気の高いパビリオンのひとつになっており、我々が訪問した日（6月7日）も、オープンと同時に行列ができ始め、最大で2時間待ちという状況だった。

この日から一週間、日本館のイベント広場で京都府、京都市、本所などオール京都で「京都ウィーク」を開催。和食文化の中心である京都を万博に来場する世界の人々にアピールするのが狙いだ。オープニングセレモニーでは、芸舞妓の舞、京都の酒米「祝」を使った酒樽の鏡割りなどで、多くの来場者を惹きつけた。

ミラノ万博は、テーマが示す通り、世界の人口が急増する中、貧富の差による飢餓や耕地不足、環境破壊の問題に向き合うことを目的としている。ローマに本部を置く国際連合食料農業機関（FAO）では、世界では約8億500万人、9人に1人が飢餓に苦しんでいる一方で、世界中で人間の消費向けに生産される食料の約3分の1（おおよそ13億トン）が毎年無駄または廃棄されていると推計している。

日本館ではそういった現代の地球が抱える様々な問題を可視化し、課題解決に向けた日本の最先端の技術開発や国際貢献の取り組みを紹介するフューチャー・ラボ空間など、工夫を凝らしたアトラクションでテーマに沿った展示を展開している。しかし、現実にそういった問題を直視して万博を訪れようとする人はどれくらいいるのだろうか。テーマはそっちのけでドイツ館ではビールとソーセージ、チリ館ではワインなど、世界各国のグルメを楽しむだけのイベントになってしまっているように思えてしまう。日本館のサブメッセージは「いただきます、ごちそうさま、もったいない、おすそわけの日本精神が世界を救う。」とある。ぜひ、日本の食文化が未来の人類共通の課題解決に貢献するという強力なメッセージを発信してもらいたい。

メード イン イタリーにこだわる「オロビアンコ社」訪問

世界を魅了するイタリアデザインと特色ある企業経営を学ぼうと、ミラノ近郊の町ガララーテに本社や工場を持つオロビアンコ社を訪問した。CEO兼デザイナーのジャコモ・マリオ・ヴァレンティーニ氏が1996年に設立。主に皮製品のバッグや小物、カーボンファイバー製のスーツケースなどを製造販売、日本でもワンショルダーバッグの草分け的ブランドとして人気が高い。資本金約1500万円、従業員数48名という、いわゆるイタリアの典型的な個人経営の中小企業だが、その製品は世界中のマーケットで展開されており、年間売上高約52億円のうち海外比率が90%という優良企業である。

スーツケースについて説明するジャコモ社長

最初に、ジャコモ社長自ら工場の前で出迎えていただき、カーボンファイバー工場を見学した。最新の技術を用いて、飛躍的に強度を高めたカーボンファイバー製品は、主力のスーツケースの他に、椅子や自動車部品など用途を今後さらに拡大していくこととなる。スーツケースは軽くて丈夫、デザイン性や機能性にも優れており、アラブや欧米のセレブからのオーダーを受け、受注生産している。倉庫で見せていただいたものの中には、価格が約800万円というオーダーメイドの特注品もあった。インテル・ミラノの長友選手も愛用しているという。

次に皮製品工場を見学。最新のレーザーカットで上質な皮を無駄なく使用するなど、伝統的なクラフトマンシップ（職人技）に現在の技術を融合させている。メードインイタリーへのこだわりは徹底しており、留め金やビスなども全て自社で製作している。ここでも顧客からのオーダーに素早く対応するため、様々な種類の高級革素材をストックしている。

オロビアンコ社の最大の強みは、ジャコモ社長の先進的なデザイン力と、地元イタリアの良質な素材とクラフトマンシップによる商品開発力だ。ジャコモ社長のメードインイタリーへのこだわりは相当なものだが、最近では日本の素材や技術力にも注目しており、自社製品に取り入れたり、日本のデザイナーとコラボしたりしている。今年5月には京都も訪問され、今後京都企業との新商品開発に結び付く可能性も高いのではないか。

カーボンファイバー工場でのレクチャー

2015年 会頭ミッション

イタリア・ポーランド視察団報告

ミラノ・フィレンツェ　クラクフ

フィレンツェ商工会議所ではマリオ・クーリア理事（左）と面談した。

本年、京都市とフィレンツェ市は姉妹都市提携50周年、本所とフィレンツェ商工会議所は友好提携10周年を迎えた。

本団は、まずフィレンツェ商工会議所に表敬訪問し、マリオ・クーリア理事と面談した。フィレンツェ商工会議所では今後、世界の地域を特定し、協力関係を深めていこうとしており、日本・京都もその候補の1つにあがっている。同じ伝統と文化を持った都市として、産業界の交流も深めていくため、今後両会議所間で情報交換を密にしていくことになった。

次に、フィレンツェ市役所の500人広間で行われた京都・フィレンツェ姉妹都市提携50周年記念式典に参加した。同日夜に、「フィレンツェ5月音楽祭」で公演する京都市交響楽団による四重奏をバックに、笹岡隆甫氏の生け花パフォーマンス、トスカーナ日本人会児童によるコーラス、芸舞妓の舞披露、両市長による提携確認書への署名などが行われた。

また、フィレンツェでは、イタリアワインの名門アンティノリが2013年2月にオープンしたワイン観光と生産の拠点となる最新鋭のワイナリー「キャンティーナアンティノリ ワイナリー」の見学や、起源は13世紀の修道僧達が薬草を栽培して薬剤を調合したのが始まりという現存する世界最古の薬局「サンタ・マリア・ノヴェッラ」を訪問した。いずれも友好提携を機会に京都企業との関係を深くした企業である。

フィレンツェで周年事業と友好企業を訪問

ポーランドの京都・クラクフ

フィレンツェから搭乗する予定のフライトが、悪天候によりキャンセルとなり、クラクフの到着が予定より一日遅れとなってしまった。11世紀から600年近くポーランド王国の都として栄えたクラクフは、近隣諸国からの侵略を受け続けたポーランドにあって奇跡的に破壊を免れた。20世紀にはドイツに占領されたが、連合軍は歴史的建造物の多いこの街へは空襲を避けたため、美しい中世の姿をそのまま残すことができた。市街地は1978年にユネスコの世界文化遺産に登録されている。

市街地の中心には、ヨーロッパ最大の広場リネク・グウヴヌィ（中央広場）がある。一辺200メートル、面積が4ヘクタールに及ぶ広場にはいつも多くの人々が行き交い、そこここにお洒落なカフェや鮮やかな花々のあふれる屋台、みやげもの店などが立ち並んでいる。中心地は車の立ち入りが制限されており、その代わりにお洒落な馬車や電動カートが観光客の足代わりになっている。LRTも庶民の交通手段として活躍している。「歩くまち京都」を目指す観光都市・京都としても、見習うところがありそうだ。

また、ポーランド全体の経済状況をみると、欧州の生産拠点として産業集積が進み、EUの中でも実質GDP成長率はここ数年トップクラスを維持している。経済が順調に成長し、3800万人という市場規模の大きさからも、今後消費市場としても大きな潜在的可能性を秘めているといえる。日本の貿易に占める割合は輸入0・1%、輸出0・2%で、これから拡大できる余地も大きく、東欧時代に整備されたエネルギー、輸送インフラ分野も老朽化が進んでおり、その改善に日本の技術が求められる可能性もある。親日国家でもあり、京都企業にとっても様々な分野で魅力的な相手国となることは間違いない。

アウシュヴィッツ・ビルケナウ強制収容所

クラクフから車で約1時間、オシフィエンチムという町に、世界文化遺産に登録されているアウシュヴィッツ強制収容所がある。70年前当時の姿をほぼそのままとどめており、その威容は訪れる者を圧倒する迫力を秘めている。この場所でガス室に送られた人々は110万人とも150万人ともいわれているが、未だに全容は判明していない。ただ、収容所といっても、実際には送られてきた人々の70～75%が収容されることなく直接ガス室へ送られたという。

20世紀に人類が起こした最大の過ちといえるナチスドイツによるユダヤ人の大虐殺。その負の歴史を絶対繰り返してはならないというEU諸国の固い意思が、この地を次代の人々の教育の場として残すことを選んだ。ナチスドイツの同盟国として戦った日本国民は、どういう想いでこの地に立てばよいのか、重く深く考えさせられる場所であった。